

関東教員大戦争にあたってのミーティングから

S：今回のグループ展は、タイトルからもわかる通り、作家が教員であるということです。單に作家が作品を発表するといった芸術的行為だけに焦点をあててゐるのではなく、教員として、生活の糧を得ている現場の声、あるいは、生徒の作品と一緒に展示して芸術なり芸術なりを、認めたコンテキストから考えてみようかと云う観で企画しました。今日現代美術と呼べてゐるものが、商業ディスプレイ、COC等、私達の日常生活の身近な所への展開が成されている一方で、現代美術の領域が抱え込んでいた制度批判なり矛盾なりがあまりにも対立的な出来事として、認られなくなつてきてしまふ現状を、教育といいかにも胡蝶くさい現場に照らしてみたらどうかとなってことです。今回衝撃で驚いた作例は、横浜・安政賞を取ったといった頃の、生活を舞台にして作品を作つて行くこうとするものでも、よき 教育者としての意識もない、教えていくことで生じる矛盾を制作してゆくことによって生じる矛盾を同じ次元で表現している。特に、表現と生徒との間で試行している人達だと思いますので、画廊としても大いに期待して居ります。

O：教えていて、僕の作品と生徒の作品とが、奇妙なほど似てくる事が有ります。例えば、平面に三次元の空間が出現する事自体の虚構の発見所が、理解出来なかつたり、隠れてしまつてゐる場合この時、自分に見えている物を、どんな風に表現したら相手に伝わるかと云うのは、生徒達にとって、研究的な問題です。僕等とか、高大に通学する者は、意識がいいから、石膏デッサンみたいなのは、すぐ理解してしまうけど、以前委嘱にて校舎指導者ぎみの女子生徒がいて、石膏を彫かせた事があった。描き方を教え、何度も僕が、その態度 手を加え、形を取つてやるのだけれどすぐ真っ黒でめちゃくちゃになる。石膏像のイメージにならない。その頃、僕も若かったから、こんな場面に出くわした事がなく、その子をどうしたりして、しまいには、こちらから怒を投げてしまった。今から思うと、彼女、绝望的な作業をしていましたんじゃないのかなって気がする。

ジャコメッティみたいない、いやそれ以上かな。現実の空間に存在する物を、平面に「直線」に書き換えるともがいている。尺度とかたとえを全然、借用しない、僕は、彼女を結果的には、更に自閉的な状態に追い込んでしまひ、教師としては失格なんだが、作品を作つたり、教えたりする上で、彼女の行為は、忘れる事ができない。

よく、研究室内パンフレットに、周囲にしわをよせて、複雑ぶつた自画像が、良い作例として載っている。横に メルカー、ボンティの言葉が添えてあって、そういうのを見ると、こりゃ一極だなーと、いつも思ってしまう。單なる怪み、つらみの世界じゃないかって。

N、A：私は先生に成って、まだ二年たらずですが、毎日が戦争の様で、骨頭では考えられない事が、次々に起る。こういう状況の中で、表情を教えるってことは、そら、もう大変で、毎回も感じています。本來、子供達は、ものを感じたり、何かを作ったり、感想をしたりするのが好きであるのに、「美術」という環境になると「どーせ、俺は、下手だから絶かねえよ」とって何でもしない。上手／下手と云う結果から自分で推し量る環境が書いていて、プロセスの面白さを味わう事が出来なくなつていて。だから、上手／下手とか、頭が良い／頭が悪いと云う経験からではなくて、自己を表現するとなると、もう惑を剥つたり、トイレのドアを腰してみたりっていう暴力って謂ね。

K：今の生徒達ってのは、様々にビュアルなメディアを通じて、圧倒的な量の視覚的（受動的）経験を受けている。自分のバランスを保つ為にイメージの取扱腕をかなりハードに、行こなう事を優先され続けている。だから、自己のイメージを創造するってことは、もう最初から放棄しているのが現状だって所がある。そして、教員とかファッションが非常に気にする。休み時間の度にトイレの鏡の前や手鏡で自分の顔を見ていたりする。人間が人間を評価するというのは、先程も述べたが、その世界を人間同志で、過しているに過ぎないと想うのですが、ついで私の「判断」をしてしまう恐ろめたさを忘れがちではないのかと、時を感じる。

P：美術というと、慣習だの、個性だのを待ばず事が前提とされていて。いわば、骨頭となってゐるが、学校の中での高揚感の度量を尋ねると、もう余分な物って感じだ。学校が益々 管理が巧妙に強化されてきている中で、その中で慣習だ、個性だ、と云って區別づけるをしない僕等は、管理を強化する為のガス抜きみたいな機能を果たしているのかも知れないと思う。僕等が、生徒へ、或る楽しみを与える、話等の個性なりを詰め込んでいるんだ」と云う嘗ていつの人は、美術教師は、高揚感だから誰でもある説だけれど、逆に、本当に生徒にとっていいのか、疑問だ。自分で 作品を作り続けるって行為は、或る面では、その 慈意を裏切るって事だと思う。

Y：皆さん、中学・高校の先生と云うことで、かなり固執な顔に成っていますが、私は、單純に子供の個性を過激にしまくらタイプ。特に幼稚園や 小学生等は、あまりプランに拘泥なく、自分で外で拾つて来た物とか、小さな巻き苔等と対話しながら、生き生きと、作っていくでしょ。其処に見れる姿や出来物の書きを他と比較して、がっかりする様な姿は、あまり見られ無い確に思う。子供達の情報源で云うのは、週刊の花草や虫であつたり T.V であつたりガラスに反射して見えた 何だかよく分からぬ形だったりする説、とにかく楽しく元気を出そうって感じ。皆さん、画一的だとか、自閉的だとか、管理的だとか云うけれど、寧ろ私達の見方の方が、意図せずして、子供達の 色使いとか、顔とかに見られる「ぐふぐふな男氣」を見落しているんじゃないかも。

A：私が今回の企画に、興味を持ったのは、作品至上主義というか、表現至上主義というか、骨でものの頭を批判していた、森鷗外氏の言った「プラクティス」を問題にしない、表現が 個化し作品の中にそれが根み込んでいると言ふ人がいるが、是たしてどうか。田原の美術という、と運営の実質に体良く映画されただけではないのか、作品を作らないこと、そのことをもう一度聞いてみたい、アフリカの原住民の絵画が、マーバン・ブリミティフ・アートとして作品として流通したり、おそらく、今回の生徒の作品も、特に、〈現代美術の作品〉として、観られていくでしょう。しかし、現実の生徒の大半は、うまく描けないし、ありきたりの表現しか出来ない。僕は、むしろ、そのことの意味を提示したい。全てく作品として販売されていく状況の中で、作品の手前のプラクティスの可能性なり不可能性なりについて。